

第二次世界大戦末期の昭和二十年（千九百四十五年）八月五日正午過ぎに東京都南多摩郡浅川町（現、八王子市裏高尾町）内の国鉄中央本線湯の花トンネルで、アメリカ軍のP-51戦闘機複数機が満員状態の列車に対して機銃掃射を加えて多数の死傷者が発生した事件である。これに関しては斎藤勉さんが書いた（中央本線四一九列車）という本が、のんびる舎から出版されている。その数か所に父の書いた当時の体験記が引用されている。



父が書き残しているそれには、

・・・八月六日の記・・・『死の列車』という題名がついている。

八王子の被爆で、民平叔父が諏訪に行く事が出来ぬ為、五日の朝僕一人が諏訪に向かう事となった。二日に予定の二人分の筈の荷を二人の叔父と三人で背負って新宿駅へ行き、長い間待った後乗り込んだ。入ってすぐのA席に座り掛けたが余りにも入り口近くなので、それと背中合わせのB席に座った。その選択が生死を分けるなどとは知るよしも無かった。ほぼ満員で通路にもギッシリ人が立っていた。僕の左に立っているのは同年輩の若い女性だった。（記事①）

十時三十分新宿発の列車は、約二十分遅れて発車した。（記事②）立川駅で空襲警報発令。列車は注意深く約二十分停車の後ゆっくりと徐行した。十二時頃浅川駅（現在の高尾駅）に入って初めて敵機の爆音を聞いた。ブラインドが下ろされ薄暗い車内で皆固唾を飲んで待った。しかし何事もなく機音は東へ去ったようだ。列車は再びゆっくりと走り始めた。後で考えると、この発車も徐行も間違っていたような気がする。八王子から続いて来た浅川の町の焼跡を後にして、列車は次第に山間へ登っていく。両側の林から蝉の透き通った声が響いている。しかし、その頃からまたゴーゴーたる爆音が聞こえて来た。不安の影が心に兆したが、敵機は東へ去った筈だし、もうすぐトンネルに入るからそうなれば大丈夫だと漠然たる恐怖を押し殺して居た。トンネルの手前は少し開けた所である。汽車は北側の山腹を走る。「敵機だ」外を眺めていたらすすぐ前の男が叫ぶのを聞いて、本を読んでいた僕はギクツとして窓を見た。来た！南側の山の稜線すれすれに敵機がいた。そして一番機はすでに突っ込みの姿勢だった。翼がグラグラ揺れる。一瞬車内の空気が凍りついた様に張りつめた。立っていた人たちがしやがみこむ。通路にギッシリ立つ程に混んでいたから、座っている僕のしやがみこむ余地はない。とっさのことで何も考える余裕はない。身を隠すものは何一つない。この瞬間、もう駄目だと観念した。運命に任せる他はない。死んだと思った途端に名に落ち着いた。腰を掛けたまま膝に手を置いて、少し前かがみになって窓を見上げた。バリバリバリ：第一撃が来た。列車がググーツと止まる。開け放った窓を通して鉄路と平行に走る電線がビンビンと音を立てて切れ、蛇のように空に踊った。敵機は次々に突っ込む。僕は顔を伏せた。やけに落ち着いた気分というより、呆然としていたのだらう。その時何かが背中にぶつかった。殴られたようにピリツとする。破片くらい受けたかなと思った。しきりにビュンビュンバリバリ・・・とくる。

誰かが「腰掛けを上げる」と怒鳴る。少しでも防御になるかもしれない。キャツとかウーンとか様々な悲鳴と怒号……。硝煙の匂いが鼻を付く。外の畑には一面に土煙が上がっている。どうしようもない事態だったが、そんな中で不思議に頭が働いた。未だ俺は大丈夫と思うと急に生きたいという気持ち湧いて来た。必ず反復攻撃が来るだろう。南からの攻撃がとぎれたら逃げ出そうと身構え、ある一瞬に窓側の男に続いて、窓枠に手を掛け一気に線路脇へ飛び出した。底から又下の畑へ一間ばかりを飛び下り、西へ少し走って又幅二間ほどの谷底へ飛び下りた。案の定バリバリと北側かららしい攻撃があった。見上げると目の高さの所に鉄橋の裾がありその辺に土煙が上がった。谷底に伏せて、ギリギリと沢の奥へ向かって這って行った。「おい、谷へ逃げろ」という声もする。ふと白いシャツを着ている事に気づいた。目標になると思い、脱いで裸になった。息がぜいぜいする。鉄橋を潜って沢奥へ進むとそこは茂った樹々の下でやや広く大勢の人が避難していた。負傷者がうめいている。太腿から血を出している人、人の血を浴びたのかシャツを真っ赤に染めた人……。松本方面へ行く兵隊が多かったらしいがしきりに動くな動くなという。こう書くと随分時間が経っているようだが、実はほんの数分間だったのだろうか。ひどく人懐かしく、やたらと喋りたい気分だった。すぐ横にいた若い女性が僕を見て、「あなた裸になってどうしたんですか？怪我？」と聞く。「敵機の目標になるかと思って脱いだんですよ」と答えると、「あら。私も白なだけど困っちゃったな」という。腰の手拭が何処かへ行ってしまった。座り込んで煙草を吸う。うまい。しかしひどく腹が減った。まだ空襲警報中だがもう敵機の音はない。大丈夫だと判断して、列車から食べ物を取って来ようと、鉄橋の脇を上る畑へ這い上がった。畑を丁度一輛分くらい歩いて自分の車輻に取り付き、よじのぼって車内に入った途端、思わず目をそむけた。(記事③)すぐ目の前に母親が赤ちゃんを抱いたまま転がっていた。僕が座りかけて止めた背中合わせのA席の乗客だ。頭が柘榴のように割れて、白い脳味噌がグワツと溢れている。赤ちゃんは鼻から口にかけてそぎとられているらしい。血が一面に飛んでいる。それだけではなかった。その横の通路に若い女性が転がっている。僕の左に立っていた人らしい。腹をやられ、青い上着に真っ赤な血がにじんでいる。目をつむったまま、こぶしをにぎって「くるしい！」と言ったように思うが、またすぐグツタリとなってしまう。顔色は蒼白だった。どうする事も出来ない。車内を眺める余裕はなく、ただ呆然として、上着と弁当の入っている筈の包みを持ってあわてて車輻を飛び出し、また谷へ飛び込んだ。一升瓶にマーキユロを持っている人がいた。負傷者の手当てが始まったようだった。山の上の方から、「自動車 came 来たから、負傷者は来い」という声があった。何か指令を受けたのか兵隊たちがザーツと立ち上がって移動しはじめた。ホツとすると急に体全体の筋肉が緩んでしまったのか、ひどく大便がしたくなった。沢から登って人のいない所の草の中にしゃがみこんで済ませた。のどがやけに乾くがどうする事も出来ない。そうこしているうちに空襲警報解除になった。今度は皆がぞろぞろと谷から上に登って行った。畑の中に見覚えのある唐草模様の風呂敷包みがある。僕のもので、中身は梅酒造りの壇に水飴が入っていた。誰かが間違って持ち出して放り出したものか？車輻に入ったが死体はなかった。荷物を全部持ち出して畑の隅の草むらに固めて置いた。岡谷工業出身の長岡高工の学生と出会い、一緒にパンを食べる。なんとなく学生だけが集まってきて「どちらへ？」といった調子で仲良くなり「よかったね。よかったよ」と喜び合う。一人は風呂敷包みを見せてくれた。弾丸で中程が裂き取られていた。地元の人なのか戸板が持って来られ負傷者や死体の収容が始まっていた。「学生さん達、手伝ってくれ」というので、皆で立ち上がる。(記事④)死者の姿は皆無惨だった。焼夷弾で焼かれた死体は見慣れてしまうほどだったが銃撃のそれは初めてであった。頭が割れたり、腸が飛び出したり：もう人間というより大きな魚が転がっている感じだった。戸板に死体を乗せ沢沿いの細い坂道を下り死体置場の民家の広い庭に運びこむ。次々と死体が運び込まれ、いっぱい感じ：死体を下した時すぐ横に若い女性が寝かされていた。もう真白というほど血の気がなく、白い目を大きく見開いて息をしているかもわからぬ程：もう死者の相だった。「もう駄目だな」見ていたららしい人のつぶやくのが聞こえた。死者は三十名以上あったろうか(実際は四十数名だったらしい)。負傷者は数十名もいただろうか。それがトラックでどんどん運ばれ始めた。多くの荷物を抱えて当惑した。修復の見込みは皆無、与瀬へは山道を三里半、浅川(高尾)へは一kmだという事だ。ともかく一つは手に負えないと判断し、手動ミシンを背負って部落へ下り、取っ付きの五藤さんという家へ飛び込んだ。三十代半位の奥さんが出てこられた。訳をお話

ししてミシンを預け、また線路まで登り、リュックサックを背負い、両手に荷物を下げて浅川駅に向かった。右肩の付け根を何処かへぶつけたのか痛むので重い荷を下げるのは苦痛だったが、人に助けられながら駅へたどり着いた。しかし電車は出ないという。駅前で東に向かうトラックに乗せてもらったが、八王子止まり。**(記事⑤)** ここまでは電車も来るらしいので、ホームで待つ。何時のものか線路の辺りに機銃の葉莢がいつぱい転がっている。大変大きく機関銃というより、機関砲らしく思えた。待つ事一時間余りやっと電車に乗る。へとへとになって、家にはたどり着いたものの何時までもぼんやりしていた。とにかく僕と殆ど体が触れるばかりの位置にいた人たちが死んだ。ほんの紙一重の偶然が生死を分けたのだ。つくづく人の運とか宿命のようなものを感じた。

【その二日後、父は銃撃現場に荷物を取りに行っている。】

八月七日午後。叔父からお礼とするお茶を頂きミシンを受け取りに行く。一昨日の死体置き場には、一面に石灰が撒かれていた。五藤さんの奥さんのお話では、四十数名の死者があり昨日やっと火葬にしたという。部落の人たちにとっても大変なことだった。又思い出して慄然とする。全くよく死ななかつたものだと思った。運が最大かもしれないが、何度かの空襲の経験で判断も動作も機敏だったかもしれない。山の方へ逃げたのに撃たれて死んだ人は白いシャツだったという話もあった。帰りは浅川駅で電車が故障、待つ他は家へ辿り着いたのは六時過ぎだった。入浴す。夏のは実に千金に代えがたい。夜、花札。

そして昭和六十年の四月にその当時のお礼が言いたくて五藤家を訪ねるのだが、それが本の最後のほうに記載されている。**(記事⑥)**

## 記事①

二人は「点呼を終えた人と窓口の交替をして」列車に乗った。磯部は母親がお腹が減ったらいつでも食べられるようにと煎ってくれた豆を取り出し、「物のない時代でしたから、列車の中でも、まわりの人を気づかひながら、少しずつ二人で食べて」いた。

背中合わせの席には東京帝国大学工学部の三年生だった守矢日出男(二二歳)が座っていた。疎開中の家族のところに行くはずの叔父が、八王子空襲で行けなくなってしまうのでかわりに荷物を届けようとしていた。入り口近くのこの二人が座っている席に座ろうとしたが、思ひなおしてここに座ったのである(体験記)。これが運命をわけることになる。

埼玉県大宮市の片倉工業に勤めていた名取安治(二〇歳)は、徴兵検査も受け出征も間近いと思ひ、その前に長野県諏訪郡落合村先能(現・諏訪郡富士見町)の自宅に帰り、先祖の墓参りをしようした後から二両目に乗った。混んでいたもので、進行方向左側の洗面所に立っていた。そこにはもうひとり自分より若い男性がいたという。

## 記事②

やがて四一九列車は新宿駅を静かに走りだした。守矢日出男の体験記(当日のことを翌六日に思い出して書いた日記をもとにして書かれている)によると、二〇分ぐらいの遅れだったというから午前一〇時三〇分ぐらいの出発だったらしい。

七月に入って米陸軍戦闘機P51は、東京・八王子市内だけでも六日、八日、二八日の三回にわたって来襲し、一〇日と三〇日には艦載機が東京の北多摩・南多摩・西多摩の三多摩一円を空襲している。また八月五日の二日前の八月三日午前中にも関東地方に約一二〇機のP51が現われ、都内をはじめ各地に機銃掃射を加えて、都内では死傷者が出ていた。

### 記事③

守矢日出男は沢から上がって弁当を取りに車両に入ろうとした。

畑をつつきた隙に車両の入り口があった。そこへとりつき車内に入った途端、目の前の凄惨な光景に思わず目をそむけた。すぐ入り口の床に女の人が子供を抱いたままころがっていた。頭が石榴のように割れ、白い脳があふれだしている。子供は鼻から口にかけてけずりとられているらしい。それだけではなかった。すぐ次に若い娘さんが転がっていた。私の横に立っていた女性である。腹をやられている。青い上衣に真っ赤な血がにじみ出していた。目をつむったまま手をにぎりしめて力のない声で何かを叫ぶとまたぐったりとしてしまった。銃撃中、私の背中を打ったのはどちらかの手であったのかもしれない。どうすることもできない。ただぼんやりとまた谷へ舞いもどった。

### 記事④

列車に同乗しながらも九死に一生を得た学生や兵隊などの乗客も、負傷者の運搬や現場での治療にあたった。将校らしい軍人が無事な兵隊は救護に当たれと言っているのを聞いている人も多く、実際に兵隊も負傷した仲間を中心に、救護所へと運んでいる姿が目撃されている。

守矢日出男は学生同士で集まっていたところを「学生さん、手伝ってくれ」と言われて救護活動に加わった。その時の惨状を「死者の姿は無残だった。焼死体をずいぶん見てきたが、もっと生々しく凄まじいものに思われた」と記している。

山梨県南都留郡河口村（現・南都留郡河口湖町）の実家に帰るところだった、日本医科大学予科一年の井出正彦は、

兵隊だったかわからないが、持っていたマキユロの原抹を一升ビンにいれて、沢の水で薄め治療に使った。包帯がないから、みなシャツを破り、ゲートルをはずして包帯がわりに使った。付近の民家から戸板を何人かの人が持ってきて、列車の中に持ち込んだ。また負傷者を戸板にのせてトンネルから出すとき狭いので苦労した。（\*1）

### 記事⑤

川駅まで来て上り列車に乗っている。また、守矢日出男は両手に重たい荷物を下げ浅川駅まで行ったが列車が来ず、トラックに八王子駅まで乗せてもらい、ここで一時間半ほど待って電車に乗り、渋谷駅にたどり着いた。

姉の黒柳良子の死を小林病院で確認した美恵子は、トラックに立川駅まで乗せてきてもらっている。亡くなってしまった姉が全部のお金を持っていたので切符が買えないと駅員に言う、「かまわない、こういう事情だと言えればいい」と言われ、立川駅でも、五反田駅でも、久が原駅でもその通りに言って、一銭も持たずに世田谷の自宅に午後七時三〇分ごろにたどり着いている。

昭和六十年に行った時の様子を、本の中で語っている。。

前から三両目付近に乗り、悲惨な情景を目撃した守矢日出男は、帰りに自分の荷物を五藤宅に預かってもらいながら十分にお礼が言えなかったことにずっとこだわっていた。そして退職をまじかに控えてその思いを払おうと訪れた。

昭和六十年四月十五日の事だった。丁度八王子に用事があった序でに、裏高尾の部落を訪ねた。校長を退職して現役を退くに当たって、可能ならば、こゝに住んでおられた一人の女性にお会いし、戦後四十年間気になるまゝに放っておいた事に一つのけじめを付けたかと思つたからである。それは、戦争も末期の昭和二十年八月五日のことだった。部落の奥まった所の中央線小仏トンネルの前に、湯の花トンネルという短いトンネルがある。その直前で、下り列車がアメリカ軍艦載機数機の銃撃を受け、数十人が死ぬという事件があった。(中略)その列車の乗客の一人に僕がいた。その二日前、疎開中の家族の所へ行く筈の叔父が、八王子空襲の為に不通で行けなくなり、その荷物を僕が届ける事になったのである。背中合わせの母子、すぐ左に立っていた若い女性が亡くなる等の激しい銃撃が終

わり、地元の人に協力して死体運びを手伝った後、持ちきれぬ荷物を持て余し、この部落の五藤さんという家に飛び込み、奥さんに手動ミシンを預けて、二日後受け取りに伺つたという経験がある。このトンネルを過ぎる度に、もう一度あの奥さんにお会いして御礼を言いたいなと思ひながら、一方では戦争の記憶から逃れたい思いが強いまゝに、四十年を過ごしてしまったのである。退職の機会にこれだけは済ませたいと考えたものだ。幸い天気もよかった。高尾の駅で降りて、昔のようにテクテクと歩いた。四十年前とは全く変わっていたが、微かな記憶を辿って、中央線のガードをくぐった所から、浅川に沿って中央線と並行する坂道を登った。下ってきた会社員らしい男に聞いてみたが、他から移って来たらしく全く解らない。分教場を過ぎてから、右側の生垣のある家の縁側で、奥さん方三人が、話し込んで居られるのを見て、庭に入って尋ねてみた。「五藤さんの奥さんはずっと前に亡くなつてしまつたが、息子さんは、お祖父さんの会社を継いで、世田谷で工場を経営しています。家は誰も住んでいないが、昔のまま残っていますよ。すぐこの上の煙草屋さんで聞いて御覧なさい」という。礼を言つて又登る。煙草屋といつても普通の家、玄関の脇に、自動販売機があった。声をかけてみたが、誰もおられない。お留守だった。家の前はバス停、そのベンチに、バスを待っておられた老婦人が、「今日は法事で皆さんお留守ですよ」と教えてくれた。この家は峯尾さんというお宅、この婦人も縁続きのかたという事だった。実はこういう事でやつて来たとお話すると、「その家ならずこの家ですよ」と教えてれると共に、「毎年八月五日に慰霊祭をやっているが、今年は四十周年で遺

族の方もみえるからいらっしやいませんか」という。名刺をお渡しして家を見に行く。あった。木や草が繁ってしまつて荒れてはいたが、記憶の中にある家の姿そのものだった。家の前にも後にも残りのさくら咲いていた。そのたたずまいを見ながら、遅すぎたなあとしみじみ思った。暫くその辺りを散策した後、煙草屋さんの脇の細い坂道を谷川沿いに登る。次第に記憶が戻ってきた。谷川は僕の跳び込んだ谷、この道は死体を戸板に載せて運び下ろした道だった。それを収めた庭が峯尾さんの広い庭だった。線路まで登ってみたが、勿論複線で完全に様変わりして、あると聞いた慰霊碑も解らないまゝに、その日は又歩いて高尾駅へ戻った。その夜、煙草屋さんに電話をして、おばあ様とお話し五藤さんの御子息の消息を掴むことが出来た。八月五日にうかがうとお約束し、早速五藤氏に手紙を書いたところ、折り返し御返事を頂いた。当時は小学二年生で、家の裏の浅川であそんでおられたそうで、死体運びに使われた戸板に血痕が染み付いたまゝ、何年も使われた等という事も書かれていた。お母様も、この日の恐怖をしばしば話されたという事だった。これら一連の事を通じて、ともかくも長い間何となく気掛かりのまゝ過ぎて来た事に、一応の決着がついた思いであり、同時に僕の戦後に一つのピリオドを打てたような気がしたものである。

そしてこの夏、守矢は慰霊の会からの案内を受け、八月五日の第二回慰霊の集いに参加した。さらに五年後の一九九〇（平成二）年九月、両足の踵を負傷して桜ヶ丘保養院に収容された

酒向淳が四五年ぶりに現場を訪れ、慰霊碑に詣でている。

以上が、父が経験した戦時中の出来事である。